

チェルノブイリ

皆、元気です。

- 13 日、12時に東京を出発し、目的地キエフに着いたのが、現地時間午前0時30分。18時間30分かけて、とうとうここまでやってきました。シエレメチボ空港の税関。キエフへ向かうスヌコボ空港への車(1時間)、スヌコボ空港での空港での税関、と、三つの税関をスムーズに通り抜けることができました。
- チェルノブイリ救援物資、という在日ソ連大使館の証明書は予想以上の働きです。(詳しい報告は帰国後行いますが) 救援物資をもって、ソ連にきた…… 話を総合
- 「空港で荷物が出来来るのに、1時間から2時間」「税関を通すのに1時間から3時間」という状況から比べると、一線です。ここまでは、かなり「……よい旅」というです。
- スヌコボ空港で出発に2時間ほど遅れ、キエフ空港には午前0時30分到着です。空港にはすでに4時間前から私たちが一行の受け入れ先である“ジトミールスキー・ピースニック”社の2人がワゴン車とトラックを準備して待っていました。ここでの通関はすべてピースニックがやってくれました。何のチェックもなく、素通りです。ホテル……に着いたのが、1時30分。軽く食事を取りながら、簡単な打ち合わせをして、2時ようやく就寝です。
- 10時に朝食を取り、ジトミール市に向け出発です。(さすがに少し興奮していたせいか、昨日はよく寝れました。)
- ホテルを出ると地元の新聞社ニフォーの取材にあいました。ここからジトミールまでは130km。車で二時間です。……から西へただ一本の真つ直ぐな道です。
- ジトミール市に入る手前で、1カ所軽いカーブがあっただけで、ただまっすぐ。山もなければ谷もない所です。45分、ホテル“ジトミール”に到着。ここを拠点に四日間の活動が始まります。重い荷物をホテルに置き、昼食を、ウクライナジャーナリスト同盟の代表を交え、

現地報告

ピースニックとの打ち合わせ。この日はジトミール市にある、子供総合病院とジトミール市放射線医学病院を訪問し、18時にチェルノブイリ同盟（ジトミール支部）と会見というスケジュールです。

15時、子供病院。この病院は無料の奉仕作業で建てられた病院で、1987年に完成しています。もちろん病院も無料です。血液病棟は60ベッドあり、ジトミール州の全ての血液の病気のセンターとなっています。60ベッドの半分は心臓関係の病気です。それぞれ、2人の専門医が働いています。以下、医者との会話です。

伊勢：事故から5年たっていますが、白血病の患者は増えたように感じます。
マルチェンコ：5年前と比べ、数自体は増えていない。しかし、新しい形の血液病が増えた。

伊：それは検査技術が向上した事などによって、（発見が）変わってきたのですか。

マル：違います。リンパ性の白血病が多くなったのです。

伊：日本の場合は、広島・長崎に原爆がおちましたが、その後、5年後に出てきたのは、骨髄性の白血病でした。

マル：2～3年後から、リンパ性の白血病……

今日はここまで。

深江

ソ連のウクライナ共和国、白ロシア共和国を訪問中の調査団の深江さんから、FAX原稿が入りました。どうやら無事に到着し、荷物もちやんとあるようです。医療調査の方も順調に進んでいるようで、ほっと一安心です。

FAXの着信時間が6月15日（土）の20：39でした。現地時間では、同じ土曜日の午後2時半過ぎでしょう（1時半かも知れません）。

いくらFAXとはいえ、ソ連・ウクライナから遠い日本まではるばるやってくるのは大変なのでしょうか、ところどころ読みにくい所があります。また一枚目の原稿の左側3センチくらいが切れていて、読めませんでした。前後関係から補えるところは、私（反町）の想像で補いましたが、わからないところはそのままにしています。ご了承下さい。

（反町）

～『チェルノブイリ支援運動・九州』～

第1回医療調査派遣団打ち合わせ会

(1991.6.2. 北九州・真鶴会館)

『チェルノブイリ支援運動・九州』第一回医療調査団の事前打ち合わせが、同行医師の伊勢泰さん、また朝日の記者として同行することになった占部正彦さんを交えて、6月2日午後2時より北九州市の真鶴会館で行われました。

当日の議題は主に

- ①日程の確認
- ②特に見たい点など
- ③放射能測定器について
- ④報告集の作成について

などです。このうち、②の特に見たい点については、同行医師の伊勢さんから、統計のとれそうなところをあたってみたいという希望がありました。世界各国を飛び回ってこられた経験からすると、衛生局とかへ行って医療統計をまず引き出すのが普通ということですが(ソ連では、保健省にあたる。各共和国にある……新聞記者の占部さんの話)。どの程度のデータをもらうことができるかは別として、そうした行政の要をおさえておきたい、全体のデータがわかるかどうか、あらかじめ手配しておきたいということです。また、疾病構成を見ると医学のレベルとかもわかるそうです。

また、朝日記者の占部さんからは、長崎被爆者との連携という問題も頭にいられておいてほしいということがありました。占部さんご自身も、帰ってからは長崎大医学部、放影研、原爆病院等を回り、チェルノブイリとの連携をはかりたいとのことでした。広島でソ連の医師を受け入れる動きがありますが、長崎でも今年の暮れからはじめる

そうです。朝日新聞でも来年の三月くらいから同じく受け入れる予定があるそうです。

放射能測定器については、福岡工業大学の熊谷さんが説明をして下さいました。これは、去年の暮れに「支援・九州」が送ったときと同じアロカの製品です。前はジトミールを通じてウクライナの人々に5台を送りましたが、今回は2台を持って行って白ロシアの人々に手渡してくる予定でいます。この製品の使い方なのですが、実に簡単・明瞭にできているようです。これで測ると、人体の皮膚下1cmのところ、1時間あたり何マイクロシーベルト被曝するかに換算された値が出てくるのです。われわれが通常自然界から受けている放射線量が一年間に1～2ミリシーベルトですから(ラドンなどの希ガスをどう評価するかによって値が変わるようです)、これを1時間に換算すると、0.114～0.228マイクロシーベルトとなります。まあ、0.2マイクロシーベルト/hを越えるようだと通常より強い放射線量を浴びていると考えていいでしょうか。

さらに報告集の作成については、各派遣メンバーの一応の原稿分担、作成に必要な作業分担、7月中に出すという方針などを確認しました。

さて、いよいよ医療調査団の出発です。この通信がみなさんのお手元に届く頃には、調査団は白ロシアの大地を踏みしめているはず。成果の裏り多からんことを願っています。報告会、報告集にご期待下さい。

調査団メンバー紹介

★ 医師 伊勢 泰 (東京都品川区・61才) 国立がんセンター小児科医長、小児科学会血液腫瘍委員長、厚生省小児悪性腫瘍晩期障害研究班長などを歴任し、現在、国立病院医療センター国際医療協力部に勤務。

日本経済新聞に『支援・九州』が医療派遣団の同行医師を求めている記事が掲載されたのを見て、『支援・九州』に協力を申し出て下さいました。

★ 新聞記者 占部 正彦 (長崎県佐世保市) 朝日新聞佐世保支局長。はじめ、長崎に勤務した後、鹿児島を経て、佐世保にきました。長崎では、原水禁の活動にふれ、鹿児島では川内原発ができていくのを見る機会を得て、核の問題に関心を持たれるようになったということです。

★ 通訳 菊川 恵司 (福岡市) 『PP21・ふくおか自由学校』のスタッフ。自由学校では、アジアと日本の民衆同士の交流、共生をどうしたら実現できるかを求めています。ソ連の人々が何を考え、ソ連をこれからどうしたいのか、自分たちが、どう生きて行きたいと考えているのかを、見て来たいといっています。1965年から5年間ソ連に留学して、ロシア語はペラペラです。

★ 河野 近子 (大分県別府市・43才) 『グループ of エコロジー』のメンバー。「ソ連の現状を自分の目で確かめた

い。被曝を覚悟しなければならないことや病に苦しむ子どもたちを目の前にしなければならないことなど、つらい旅になるだろうが、今後原発と向かい合っていくためには、(チェルノブイリは)避けて通れない関門だ」といいます(通信No 5を参照)。

★ 田宮 京子 (けいこ) (福岡市・33才) 福岡の脱原発情報誌『ぷろてすと』を発行。『アクショングループ脱原発・福岡』のメンバーでもあり、『チェルノブイリ支援運動・福岡』の連絡窓口でもある。「原発について学習を重ねるうちに、原発は現代社会の抱える問題の縮図なんだと気がついた」といいます(通信No 5を参照)。

★ 深江 守 (北九州市・34才) チェルノブイリ支援運動・九州』事務局長。北九州の市民運動情報誌『北九州かわら版』の編集長でもあり、『原発なしで暮らしたい・九州共同行動』の事務局長をも務める。「いずれは現地に行くことになるかも知れないと思っていた。この目で見、実態を肌で感じてくることが今後の運動にとって大きな支えになると確信している。(チェルノブイリの状況を)どこまで凝視できるか自信はないが、この目に焼き付いたままを報告したいと思っている」といいます(『北九州かわら版』6月号を参照)。

チェルノブイリで何を見てくるか？

～医師の目～

医師として同行して下さる伊勢泰さんにインタビューして、今回の医療調査団における医師の役割、どんなところを重点的に見て来たいかということ聞いてみました。

◎どういうところを見て来たいですか？

調査目的としては、まず第一に何が向こうでほしいのか、向こうの要望を知ることです。そしてそうしたものが、どういうふうに使われるのかということ。それから、チェルノブイリ事故とどういう関連があるのか、ということです。

これから支援をしていくのに、医師の立場から、それが有効であるかどうかを見たいですね。

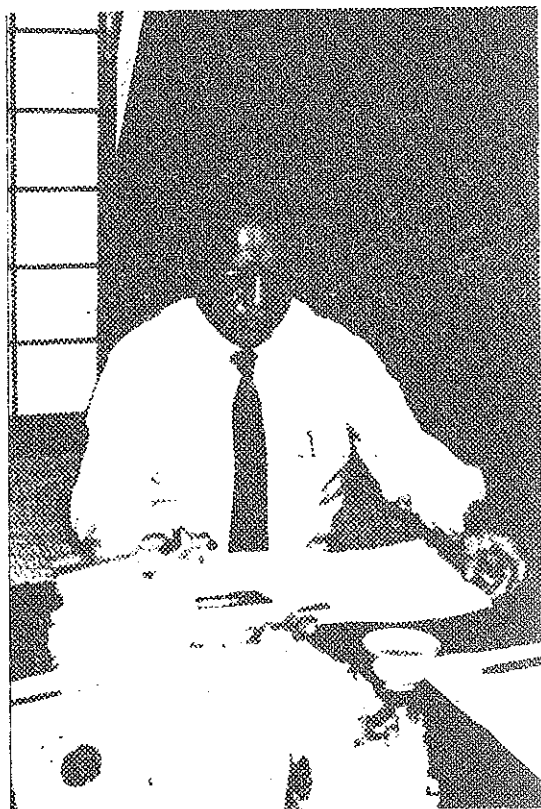
また、現在ソ連で騒がれているようなことが、本当にチェルノブイリ事故によって起こったことなのかどうか。たとえば、1000ラド浴びれば子供は確実に死にます。しかし、医学的には素人の人が書いたものの中に、住民の20%が1000ラド、1200ラドの放射線を浴びた、と書かれます。そんなバカなことではない。それだけ浴びたら、ほとんど全員が死ぬはず。いろいろな人がみて、過大に評価されていることがあるので、専門的な目でみて、見きわめたいですね。

あと、実際に向こうの医者と話して、向こうの医者のレベルも知りたい。私は、今度だけで終わるとは思っていません。少し話せばすぐわかりますから、英語のはなせるドクターがいれば、医学的な討議をしたいですね。

医学統計もぜひみたいです。衛生局は持っているらしいですよ。日本で見たという人もいます。実際の疫学的調査がどの

程度つかまれているのか、見て来たいですね。疾病構成を見れば医学のレベルとかがわかるのです。

向こうに行ったら、顕微鏡を片っ端からみて、患者も実際に診察して、それが放射線の二次災害のものかどうか、はっきりさせたいですね。欧文のもの情報によると、放射線の障害で起こるはずのないものまで、放射線の災害になっているものがあるんですよ。



◎南米のボリビアに二年間行かれていたそうです……。

ボリビアへ、日本が病院を贈ったんです。それで日本がそこへ、技術者を送るということで、私が小児科全殿と全体のリーダーとして行きました。私は専門がガンなものだから、ボリビアのガン患者が集まってくるようになって、これは結局日本と同じだったんですが……。私が行ってから、ちゃんと診断がついて、それまでみんな死んでいたのが、長期生存するようになったんです。

ボリビアでも、直接患者を診ると、患者が私を頼って離れたがらなくなります。これは、それまでボリビアではなかったことなんです。

ソ連でも、向こうの人はソ連の医者を利用していないらしい。ボリビアでも、医者を利用していなかったが、それは医者のレベルが低いからです。ソ連で医者が信頼されないのは、経済の落ち込みのために、医者のレベルが落ちていることもあるでしょう。ソ連の今の医療のトップレベルが、現在私が所属している国立医療センターの30年前のレベルにしかすぎないという話もあります。

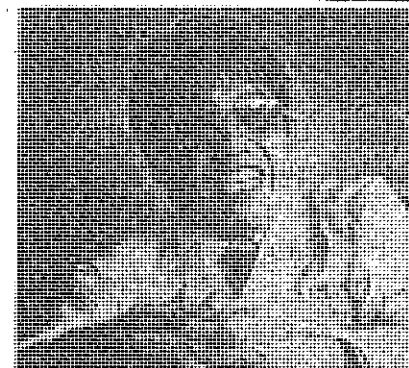
ボリビアで私が患者に信頼されたのは、

きちんとした技術を持った医者が誠意を持って患者との信頼関係を作り上げたからだ、と向こうの院長も言っていました。誠意はインターナショナルです。

伊勢さんは、現在お務めの国立医療センターの前は、国立ガンセンターで二十数年間、第一線で活躍されました。国立医療センターに移ったのは、日本で百人助けるより、国際的にこれまでの経験を生かしたいと考えられてのことだそうです。今回の医療調査団でも、調査活動の中心となって下さると思います。(反町)

原発事故調査を支援

小児がんの専門医で、国立病院医療センター国際医療協力部(東京都新宿区)の伊勢さん(60)写真が、市民団体「チェルノブ



たい」と意欲を語る。事故当時は、国立がんセンター小児科の医長。ソ連から医療の助言を求める使節団を迎え、健康への影響

イリ支援運動。九州の事務局長、深江守さん(58)北九州市から四人に同行し、チェルノブイリ原発事故の現地調査に出発する。「援助策として今後、何が必要か。私に期待されているのは、その判断。責任は十分に果たし

に深い関心を持った。今は事故後五年の、白血病の多発が予想される時期。自分も渡航を考えていたため、「支援運動。九州」が現地へ行く医師を募集している話を聞き、すぐに深江さんに協力を申し出た。滞在予定は半月程度だが、ソ連の医療レベルやがんに対する高度医療の現状なども調べたいという。

19/5.28(2)
A.(9)

「チェルノブイリによる健康被害はなかった」

—実態からかけ離れた IAEA の報告—

5月21日、ウィーンで国際原子力機関 (IAEA) の国際会議が開かれ、昨年5月から実施したチェルノブイリ原発事故の影響調査結果が報告された。

元々、原子力を推進する企業の代理人でしかない IAEA のこと、予想されたこととはいえ、その内容はとんでもない。

チェルノブイリ事故の被災住民には、「放射能に直接起因する健康障害はみられない」「白血病、ガンの発生に顕著な増加はみられない」「乳児の死亡率が比較的高いがこれは事故以前のもの」という。しかし、その論旨をよくみると、いい加減なことがよくわかる。(かつこの中は私の意見)

1. 調査期間が短く、人的資源や調査データ不足などの制約が大きい。(本気で調査するつもりがない。不思議なことに去年には、被害を記録したコンピュータのデータが盗まれている)

2. 現場周辺から避難した住民の追跡調査は出来ていない。(最も汚染した人たちのデータを除外することになる)

避難していない住民については、現在のところ健康に被害が出ていない。

(現地の研究者の認識と大きく違う)

3. (最も大量被曝したと思われる) 事故対策、復旧にあたった人たちの健康被害は調査していない。(4月のイギリスの新聞によると、チェルノブイリ原発事故の科学調査担当幹部のウラジミール氏は、事故の規模が当局発表よりはるかに大きく、死者が7千人から1万人に達していることを明らかにした。)

4. 内部被曝の線量は予測された値よりも少なかった。

(これだけの汚染をしていても、まだ汚染が足りないともいうのだろうか)

5. 乳幼児を対象に、ヨウ素の甲状腺吸収量を調査したが確認できなかった。

(半減期が8日のヨウ素では、時間がたてば分かるわけがない)

6. ホットスポット (放射能が異常に高い地点) は調査から除外した。

ソ連政府の公表した汚染地図は過大評価である。(汚染の高いところのデータを除外すれば平均が下がるのは当たり前)

7. 避難地域の汚染基準が低すぎるので住民に恐怖と不安を与えた。不必要な移住が一層の混乱と不安を招いた。(避難した住民の追跡調査をしないで、どうしてそれが不必要だと分かるのだろうか)

移住よりも食料規制の基準を緩和する必要がある。(汚染地帯に住み続け、汚染されたものを食べ続けろという。どこからこのような発想が出てくるのだろうか。もはや、このような感覚の人と議論するのは無駄である。)



この「総合的科学調査」を実施した IAEA の国際諮問委員会の委員長は、実は日本人である。ヒロシマ・ナガサキの被爆者をモルモットにしながら、アメリカの核戦略と原子力産業のために、放射線の危険性を隠蔽したり過小評価するのに大きな役割を果たしてきた、あの放射線影響研究所(旧 ABCC) の代表、重松逸造氏なのである。

原子力を統制する国際的な中立的機関を装う IAEA の正体を、われわれは十分に認識しておかなければならない。そもそも IAEA は、広島と長崎に原爆を投下した人間たちが戦後に設立した原子力委員会を母体に誕生した。IAEA のアメリカ代表を十年間つとめたヘンリー・スマイスという人物こそ、広島・長崎への原爆を開発する最初のきっかけとなった、スマイス報告(核分裂の軍事利用を提言)を提出した当人である。また IAEA の人脈のほとんどは、欧米の原子力産業の中心人物(原子力の利権によって大儲けしている人間たち)で占められているという。

チェルノブイリ原発事故の直後、IAEA のブリックス事務局長がモスクワに飛んだ途端、マスコミに発表されるチェルノブイリ原発事故の情報が極端に少なくなったことを忘れてはいけない。

また同じことが始まろうとしているのではないだろうか。時を同じくして、20日、ソ連保健省はチェルノブイリ原発事故により死者は当初発表の31人ではなく61人だと発表した。61人に限定してしまうという意図を感じる。

IAEA の調査もソ連政府の要請で行なわれたものである。アメリカとソ連、EC、そして日本の原子力推進勢力は、いま一丸となってチェルノブイリで起きている事実を否定しようとしているのだ。

いまこそ我々は、真実を見極める目を持

たなければならない。

IAEA の報告と時を同じくして、核実験によって「世界で240万人のガン死を招く」という報道がされている。そのような中で、先日発表された IAEA (国際エネルギー機関) 共同声明は、IAEA の報告でお墨付きをもらったかのように、これからのエネルギーの中心に原子力を据えるという。

この報告が、IEA の原子力推進を決議するために利用されたのだとすれば、彼らはどのような核の被害が起ころうとも、自分たちの利権のためには無視し続けるということだろう。

(根暗一郎さんの、パソコン通信の文章を一部利用させていただきました。)

河上雅夫

健康被害見られず「健康被害見られず」
5.19(B) A.

IAEA 調査限界も認める

IAEA 報告書に反発

2共和国、一部削除を要求

IAEA 報告は被害低く見すぎ

チェルノブイリ

5.24(A) A.

6.11(B) A.

ソ連保健省は、チェルノブイリ原発事故により死者は当初発表の31人ではなく61人だと発表した。61人に限定してしまうという意図を感じる。

IAEA の調査もソ連政府の要請で行なわれたものである。アメリカとソ連、EC、そして日本の原子力推進勢力は、いま一丸となってチェルノブイリで起きている事実を否定しようとしているのだ。

いまこそ我々は、真実を見極める目を持

～九電株主總會のお知らせ～

6月27日 午前10時～ 電気ビル(渡辺通り)
(集合は午前8時です)

今年もまた株主總會の季節がやってきました。九電株主訴訟では、残念ながら敗訴に終わりましたが、九州電力のお偉方を相手に、直接ものを言えるほとんど唯一のチャンスであることに変わりはありません。今年、美浜原発の事故もあり、同じ加圧水型の玄海・川内原発のすぐそばに住まなければならない、これらの原発の作り出す電気を余儀なく使わせられているわれわれにとっても、大事な總會になりそうです。

「電源乱開発に反対する九電株主の会」では6月8日に打ち合わせ会を行い、今年も例年通り、事前質問書をそれぞれの分野について関心のある人々に作成・提出してもらおうということになりました。

總會前日の6月26日午後七時から、農民会館で、事前質問・当日の質問等に関するレクチャーと最終的な打ち合わせをする事になっています。株主總會に参加される方はぜひお集まり下さい。

また、株主總會に出席するには株主でなくてはなりませんが、總會当日、外で脱原発・反原発を訴えるには、別に何の資格も要りません。原子力発電に疑問を持つ方ならどなたでもできます。あなたも一緒に脱原発・反原発をアピールしてみませんか？ 当日はおそらくかなりのマスコミが集まると思われます。年に一度の機会です。アピールの仕方にはいろいろあるでしょうけれど、あなたなりのやり方を考えてみて下さい。

連絡先：「電源乱開発に反対する九電株主の会」

(清水満 092-622-1997)

總會前後のスケジュールをまとめておきますと：

6月26日(水) 午後7時～ 株主總會打ち合わせ(農民会館)
27日(木) 午前10時～ 九電株主總會(電気ビル)
(午前8時 電気ビル前集合)
※ 株主總會終了後 反省会・交流会(農民会館)
午後3時～ 『チェルノブイリ支援運動・九州』
発足一周年總會(引き続き農民会館にて)

事務局からのお願い

チェルノブイリ支援運動・九州は昨年の六月に発足して以来、早いもので一年になろうとしています。

さて、事務局からのお願いです。会員になっていただいている方で、一年になろうとしている方は、新たに会費をお願いしたいと思います。なかには自分が会員であるのかがはっきりとわからない方もおられると思います。募金を送って下さった方で通信欄に募金とはっきり書かれた方以外の方はこちらの判断で勝手ながら会員とさせていただきます。

会費は一口千円ですが、これは何口でもかまいません。同封の振込み用紙の裏にその旨をはっきりと明記の上に、お送りください。

今回は振込み用紙を全員にお送りしていますので、すでに振込みをされておられる方もおられると思います。そういう方はどうぞ無視していただいて結構です。また新たに振込みの時にでもお使い下さい。または募金の時にでも。

皆様方からいただいた会費は、会を運営する為の費用としてまたはこの通信をつくる時の印刷代や紙代、郵送費などに使わせていただいておりますが、会員数も350名を超えるようになり、なかなか大変なところです。

チェルノブイリの人たちの為にと心ある募金をしていただいている上で、また会費を…とお願いするのはとても心苦しいのですが、内容をご理解のうえ、よろしく申し上げます。

また通信がだぶって送られているとか、名前が違うとかいろいろとありましたら、事務局までどうぞご連絡下さい。

郵便振替 福岡7-65328

加入者名 『チェルノブイリ支援運動・九州』

連絡先 北九州市小倉南区徳吉東1-13-24 深江 守

(TEL 093-452-0665)

1991.6.18

『チェルノブイリ支援運動・九州』事務局